

間元來承命所之謠曲一番述作之、以正月廿八日獻之、稿有別卷、以此餘暇急卒之解也、追而可遂
再考、於上卷者以諸書散在之何曾雜考他日欲輯錄矣、

本居内遠

〔三養雜記〕なぞく

後奈良院御撰何曾といふ書あり、羣書類從にも收めたり、そのかみのなぞくは、今やうとは
すこしく異なり、予かつてき、たるに、こばたひつくりかへして七月半を、たばこぼん、雀が利
を持たながら目をぬかれ、されども子をば羽の下にありを、硯ばこ、うみ中てんだうして月なか
なかつますを、葛葛あさつてはあたと参りを、たまごと解ける類、大かたこのおもむきなり、今
兒戯にいへるが中にも巧拙あり、破れ障子とかけて、冬の鶯ととく、心ははるをまつ、こはれ三
味線とかけて、男の氣性ととく、心はひくにひかれぬ、などやうのことあまたあれど、鄙俚なる
もの、みいと多し、

〔翁草五〕勅製謎の御歌

秋風のはらへば露の跡もなし、萩の上葉もみだれてぞ散る

是を月と解く、心は上の句露の跡なければ、つ文字也、下の句萩の上ばを散らせば、き文字のこる
故に、月と成其頃謎を好ませられ、勅製あまた有しとて、人のいへるは、四國の刀、麻糸ととく、心ハ
阿波、讃岐、伊與、土佐の片名也、

待宵にふけ行かねの聲きけば

あかぬ別れのとりはものかは

是らも勅製とかや云める、實否は不知、

渭北春天樹 江東日暮雲 是を藻と解 心は、渭北——退き、江東——退く、右の跡はもの一

車牛
くるまうし
はなれうし